

第9回 燃料デブリ取り出し専門委員会 議事要旨

日時 2016年1月20日(水) 10:00~11:40

場所 原子力損害賠償・廃炉等支援機構 第二大会議室

1. PCV、RPV 内部調査等のニーズ

東京電力より、RPV/PCV 内部調査のニーズに関し、「将来にわたる安全確保と燃料デブリ取り出しの作業遂行の観点から検討した結果、燃料デブリの形状、分布/量についての情報取得のニーズが大きい。しかしながら、情報取得のための内部調査の難度が高いことから、内部調査による直接確認以外の代替手段による取得の検討も重要である。」と説明された。NDFより、内部調査に関するNDF、東電、IRIDの3者の考え方の整合を確認する観点の説明があった。

専門委員からの主な意見は以下の通り。

○ニーズの検討においては、NDF、東電、IRIDの3者が並行して進めるのであれば検討の観点を変える、あるいは東電、IRIDで検討したものをNDFで両者の検討結果を精査してまとめる等の工夫を考えるべきである。

○燃料デブリの形状や分布のニーズが大きいのは、これまでの議論から当然の結果である。ニーズが大きいが調査が難しい状況に対して、どうするのかを考えるのが重要である。例えば、内部調査のためにさらにリソースを注入するのか、解析の結果に基づき調査すべき点を定める等。

2. PCV 内部調査計画

IRIDより、1号機地下階ペDESTAL外調査(B2調査)計画について説明があった。燃料デブリの拡がりを見る手段として、線量率の3次元的な計測と水中カメラによる確認の2つの方法を用いる計画内容について説明があった。今後実施する追加試験等についても、報告する旨説明があった。

専門委員からの主な意見は以下の通り。

○工法によって、燃料デブリ取り出しを開始する前に確認が必要な内容が違ふと思われる。他の調査等もあり、工法毎に必要な調査内容の計画を明確にすべきである。

○事故進展解析では、燃料デブリの位置による組成の違いが評価できるはずであり、そういう事も考慮して調査方法を計画すべきである。

○線量計測として、YAGで検出する技術で行う計画であるが、コバルト、セシウム、ユーロピウム等が混在する中で、核種として何があるか分かるように、事前の試験を行い、校正しておくべきである。

○燃料デブリのサンプリング技術などは、やがて必ず必要となると考えられる。燃料デブリ取り出し方針を決める等の時間制約の中で実現可能な技術開発だけに注力するのではなく、それ以降も考えた広い視野

で、調査技術の開発に努力していくべきである。

以 上